

## 今後の展開

これまでの取り組みの中で、長年行われてきた交流事業がマンネリ化しており、さらなる一般市民の交流が重要なことがわかってきました。

官民のバランス良い交流、地域間の関わりが本プロジェクト目標達成につながるものと考えています。今後はこれらを解決すべく、これまでに蓄積された知識、情報、連携を駆使し、民官学が連携した交流事業の提案・企画・実施を行うことを予定しています。

また長期的視野に立った組織の設立（香川環境プラットホーム設立準備）を目指していきます。

### 【これまでの主な活動】

#### ●2011年度

6月 実地調査 9月 スタディツアー 11月 勉強会 3月 シンポジウム

#### ●2012年度

8月 フィールド医学見学 11月 早明浦ダム周辺ボランティア清掃参加 2月 シンポジウム他

### 【2013年度における主な活動予定および関連行事】

2013年11月9日（土） 早明浦ダム周辺ボランティア清掃（高松市上下水道局主催）

2014年2月～3月 2013年度【早明浦プロジェクト】シンポジウム 他

### 【早明浦プロジェクト】メンバー

平尾智広（代表：香川大学医学部）、白木 渡（香川大学工学部）、  
板倉宏昭（香川大学大学院地域マネジメント研究科）、西成典久（香川大学経済学部）、  
鈴江 毅（山陽学園大学看護学部）、宮武伸行（香川大学医学部）、  
永富太一（香川大学社会連携・知的財産センター）、依田健志（香川大学医学部）、  
坂野紀子（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科）、吉岡 哲（香川大学医学部）

### 【早明浦プロジェクト】事務局

香川県木田郡三木町池戸大字 1750-1 香川大学医学部公衆衛生学内

E-mail : sameura@med.kagawa-u.ac.jp

URL : <http://www.kms.ac.jp/~koueisei/index.php?id=19>



## 【早明浦プロジェクト】のご紹介

～香川大学医学部公衆衛生学教室の取組～（香川大学地域貢献推進経費補助事業）



## プロジェクトについて

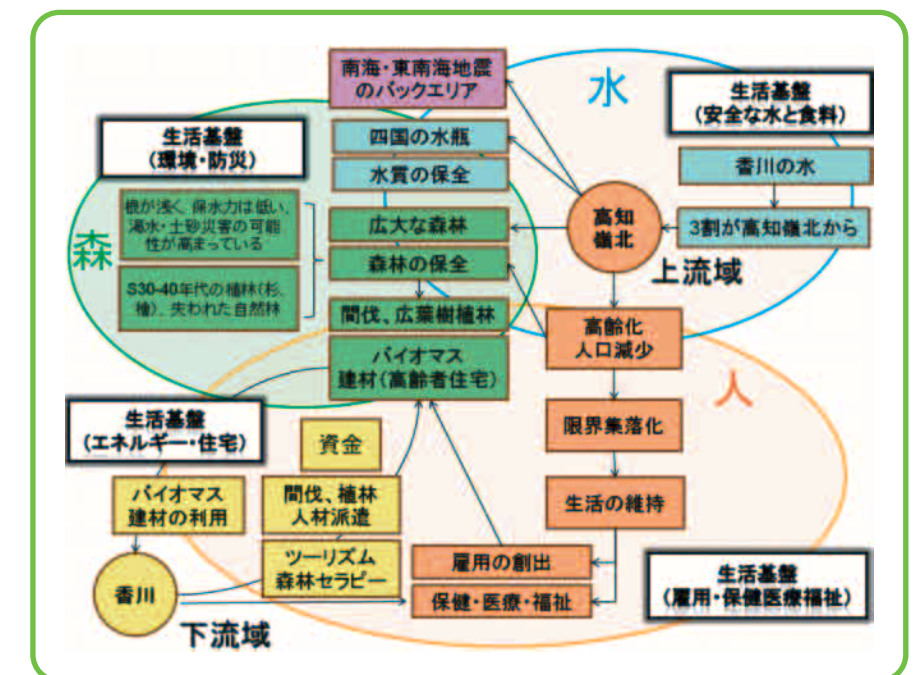
平尾 智広（香川大学医学部公衆衛生学 教授）

生活を営む上で水はとても大切です。多すぎても少なすぎても私たちの暮らしに大きな影響を及ぼします。長年に渡って水不足に見舞われてきた香川県は、讃岐と言われた時代からこの問題に直面してきました。そのようななか、昭和50年の早明浦ダム、香川用水の完成は、水不足の問題を劇的に緩和し、香川県に大きな恩恵をもたらしました。そしてこの時より、吉野川上流域と香川県は、新たな水系を通じた「上流域と下流域の関係」になったのです。吉野川上流域の水源地は豊かな森林からなっており、水系全体の環境や私たちの生活の基盤となっています。

それから40年近くが経過し、上流域、下流域とも多くの社会的問題を抱えるようになりました。吉野川上流域である高知県嶺北地域（本山町、大豊町、土佐町、大川村）では、高齢化と人口減少がいち早く進み、主要産業であった林業の担い手が極度に不足しています。このため、森林の保全が十分にできず、将来的には香川県を含めた水系全体の生活に大きな影響を及ぼしてくる可能性があります。すなわち、上流域と下流域は一蓮托生であり、県境を越えた四国サイズの問題としてとらえる必要があるのです。

これまで上流域と下流域の関係は行政主体で築かれてきました。その基本は今後も変わらないのかもしれませんが、しかしこれらの問題を理解し解決に至るためには、市民レベルにおける、人と知の交流が必要と考えています。

私たちは地域に密着した大学の利点を活かし、大学が核となり、組織の垣根を超えて、①現状の理解と啓発、②問題点の整理、③対応策の考案、④対応策の実施を目的に息の長い取り組みを展開しています。





高知県土佐郡土佐町および大川村にて「スタディツアー」を実施しました。

水源の森や周辺の環境を見学し、それに携わる人々のお話を聞き、自分自身で現実を感じる。それを通じて問題の構造を考え、解決に向けた方法を探ることが目的です。

当日は、大学などの教職員、行政職員、学生および一般市民、計30名がツアーに参加しました。

### さめうら水源の森演習林

植林された杉やヒノキは自然林よりも根が浅いため、豪雨時には倒れ易く、雨水を堰き止めてしまい、溜まった水はやがて表土とともに流れ落ち、土砂崩れなどの災害を引き起こすといわれています。

災害に強く、表土を保ち、水源を涵養する森林にするためには、間伐による山の整備が重要です。「さめうら水源の森」では、40～50%の間伐を行ったところ、6～7年で様々な木々が生えてきたといえます。



さめうら水源の森演習林

間伐した所(右側)では、日光が降り注ぎ、地面に木々や下草が生えている。

木々の間から光が降り注ぎ、木々が根を張ることにより、災害に強く、水源を涵養する山に近づいたということです。かつては間伐した材木を売りに出すこともあったそうですが、現在では価格が安く、搬出するとコストがかかり過ぎるため、積極的な間伐が行われていないのが現実です。

### 独立行政法人水資源機構の取り組み ～木の駅プロジェクト～

現在、林業に携わる人は大変少ない状況です。

「木の駅プロジェクト」は、手軽にできる副業やアルバイトを通じて、少しでも林業にかかわる人を増やし、それによって豊かな森林を復活させ、町を元気にしようという試みです。

休日を利用して山に入り、伐採した木を出荷すると、地域通貨券と交換することができます。

軽トラックとチェーンソーだけで行えることが強みであり、寄付や森林環境税を活用し、地域通貨券に上乗せ金を加えるなど、工夫することにより、普及を図っています。

### 大川村の現状

2010年国勢調査によれば、大川村の人口は411人、65歳以上の割合は44.3%で、人口減少と高齢化が進んでいます。

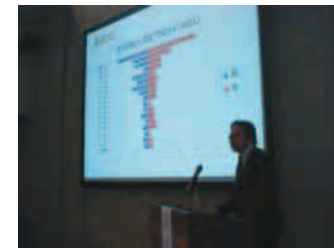
村内には医師は居らず、週に3日、隣町の病院から診療のために訪れます。村内では住民同士の助け合いが行われており、例えば介護予防では、社会福祉協議会の職員の他に、多くの地域住民が手伝いとして参加しています。また、独居者に対する日々の見守りや、災害時の避難所への誘導、安否の確認などが、住民自らの手で行われています。

高齢化だけではなく、若者の都会への流出も課題です。林業などの雇用の創出による若者の定住の促進が、村の維持に不可欠であると考えられます。

問題を知り、解決を目指すためには、まず現在の活動を知ることが必要です。2011年度シンポジウムでは、上流域、下流域双方の活動が紹介され、今後の共生の在り方について議論を行いました。

趣旨説明の後、スタディツアー報告(香川大学医学部 依田健志助教、坂野紀子助教)、高松市の取組(高松市上下水道局 森本啓三氏)、間伐材の有効活用による自伐林業のススメ(特定非営利活動法人土佐の森・救援隊 中嶋健造氏)について講演いただき、最後にパネルディスカッションを行いました。自治体、NPO法人、地域住民、研究者等、立場の異なる参加者の皆さんによる活発な発言により、意見交換および交流する機会になりました。

吉野川上流域では人口減少などの問題が深刻化していますが、この活動を通して、上流域の住民が水源を守る意識を強く持っていることがご理解いただけたことと思います。また自伐林業に携わるNPO法人の活動を知る中で、根を深く張らない人工林がもたらす災害と、それを予防するための間伐に関する理解も深まったと思います。



### シンポジウム～上流域と下流域の交流について考える～

問題を理解し、解決に至るためには、個々の組織の活動だけではなく、組織横断的な人と知の交流が必要であることがわかってきました。2012年度シンポジウムでは、上流域と下流域の交流について、高知県、香川県の官学からゲストをお迎えし、議論を行いました。

趣旨説明の後、山田国司氏(高松市市民政策局)と澤田智則氏(高知県土佐町産業振興課)に、官の立場から講演いただきました。また西成典久氏(香川大学経済学部)と大槻知史氏(高知大学教育研究部)からは学の立場で講演いただきました。ボランティア清掃、交流特産市、源流域の木材を利用した住宅関連事業の展開などについての紹介、上流域の観光資源の発掘、ウェブなどを活用した情報の発信、新たなライフスタイルの形である「滞住」など、様々な交流の形について考える機会となりました。

パネルディスカッションでは、交流の視点から、現在の事業の問題点、新たな交流の形についての提案がなされるとともに、継続的な交流を実施するための主体について議論されました。

